

RSK山陽放送ラジオ 朝耳らじおG.O.G.O.

永瀬清子の光を受けて vol. 13 二〇二二年三月二十日

春の花など f 花の美しいのは

小林章子 (RSKアナウンサー)

伊藤正弘 (RSKアナウンサー)

白根直子 (赤磐市教育委員会熊山分室学芸員)

小林 この時間は、岡山出身の詩人、永瀬清子さんの詩や生き方、その魅力を永瀬さんのふるさと、赤磐市で研究を続けていらつしやる赤磐市教育委員会熊山分室の学芸員、白根直子さんにご紹介いただきます。白根さん、こんにちは。

白根 こんにちは。

小林 さて、今日はどんなお話でしょうか。

白根 三月は、卒業式があり終わりと始まりの季節です。そして、梅、ミモザ、桜と、咲いていく花で季節の移りを感じないではいられません。今日は、永瀬さんが春の花に思いを託した詩を味わってみたいと思います。

春の花など f 花の美しいのは

花の美しいのはその紫であることや
薄紅であることによるのではない

何ものか花でないものから

花へ浮かびあがってくるきわが美しいのだ

あるいは花の夜の闇からとも云える

あるいは花の淵からとも云える

あるいは花の蕾そのものであるかもしれぬ

蟬のようにぬけてでてくるそのきわがふしぎだ

目にみえぬその移りや動き 劇 あらそい

おだまきや垂れそめた藤がかたちになりでるときの

急速な変化を私自身に考えられるだろうか

そのふしぎなしに花が牢固としてあるとしたら

それは花ではない 銅像かマネキンだ

花は咲きそして散る その痛みなしには花でありえない

(『続永瀬清子詩集』思潮社 一九八二年八月)

伊藤 僕は、人の人生を花にたとえているのではないかと感じました。死があるからこそ今を一生懸命生きよう、そんなメッセージがこめられているのかと思いました。

白根 そんなふうを読んでくださりうれしいです。永瀬さんは、花を題材にした詩をいろいろ書いています。この詩では、花の色が「紫」や「薄紅であること」などを説明して、花の美しさを伝えようとする

のではなく、なぜ花が美しいと感じるのか、どういうところに美しさを見出しているのか、その理由を書いています。少し抽象的かもしれないませんが、花の美しさとは何かという本質に迫った詩です。

小林 伊藤さんの感想にもありましたけど、死というものを意識しないではいられないということもありますし、花に心惹かれるのは、やはりその儂さを知っているからこそ、ということなんでしょうね。花が開いている時期というのは、花の一生を考えてみると、ほんのわずかな時間ということになりますね。

白根 そうなんです。永瀬さんは、花の美しさを言おうとしているのに、「何ものか花でないものから」と花そのものではないと言っています。ではどこかというところ、「花へ浮かびあがってくるきわが美しいのだ」と、変化していくある瞬間を捉えて美しいと言っているんです。それは生きて命あるものならではのことですし、その変化を捉える感受性をもつことも含まれています。

小林 この詩を読むと、人の一生にも「花開くとき」というのがあって、花が咲いていない時間もおろそかにしてはいけません。むしろ、花が咲いていないとき、咲こうとしているとき、あるいは花が終わってから、美しいものなのだと考えるきっかけになりました。

白根 ありがとうございます。永瀬さんは、自分がこのことを書かなければ、消え去り忘れ去られてしまうという思いを生涯持ち続けていました。戦前に書いた詩「私がいなければ何もない」（初出「私がいなければ何もない」『現代文学』第三卷第十号（十二月号）／『あけがたにくる人よ』思潮社 一九八七年六月）では、自分がこの世を去れば感じてい

た思いは消えてしまうことを書き、最晩年の「時間——私らは忘れやすく」（『金沢文学』第七号 一九九一年七月）という詩には、「私らは消えゆく時間を止めるためにのみ詩を書いている」とあります。こうした思いは、伝えるお仕事をなさっている小林さんにも通じるように思いますがいかがでしょうか。

小林 ラジオは特に、声や音楽が一瞬、だれかの心に留まって消えていくものだと思います。番組で、いろんな情報や気持ちを伝えて、それが一瞬、だれかの心に留まって、いざれは忘れ去られて消えてしまうのでしょうけど、だれかと時間を共有したり、同じものに共感できたりすることは素敵なことだと思います。

白根 そのとおりだと思います。時間や思いをわかちあえるのは素敵なことですね。ところで、この詩は第一連と第二連が四行、第三連と第四連が三行の十四行からなるソネットという西洋の定型詩で書かれています。永瀬さんは、イギリスのキーツやアイルランドのイエイツなどの詩、日本で最初にソネットの形式を移植した薄田泣菫、蒲原有明などの詩を読み、多くはありませんが、戦前から定型詩を書いています。たとえば、料理を盛り付ける時、美味しく見えるように、こぼれたりほみだしたりしないように、適切な器を選びます。永瀬さんが感じた美しさを書くためには、この場合はソネットという形式がちょうどよいと考えたのでしょうか。

小林 この詩を声にだして読んでみて、心地よさを感じるの、ソネットという形式であることも影響しているのですね。

白根 はい。「花は咲きそして散る その痛みなしには花でありえ

ない」。この最後の一行がたまらなく魅力的です。この詩は、生きること命あるものすばらしさを書いた詩でもあります。花が咲き散っていくように、そこにとどまらず常に変化していく姿を書くためには、永瀬さんにとって詩でなければならなかった。そして、「痛みなしには花でありえない」と全てを受け入れ肯定しています。こうしたところに、私たちは励まされているのではないでしょうか。

小林 まさに「励まされる」言葉ですね。

白根 「花の美しいのは」という詩は、美しさの瞬間を見逃さない感受性をもつこと、その感受性が捉えた美しさの本質を述べた詩であるとともに、生きること命あるものすばらしさを書いた詩でもあります。これから咲く花々のように、日々を積み重ねていくうちに、いつかきつとという思いをもつ私たちにとってエールとなる詩だと思います。

最後にお知らせです。RSK山陽放送の皆様のお力添えをいただきまして、これまでの放送内容を再構成して、四月中旬から赤磐市のホームページで順次公開する予定です。この放送を文字でも楽しんでいただければうれしいです。

小林 ちょうど一年間白根さんに四季折々その月に合った詩をご紹介いただきましたけれども、ホームページのほうは、一年遅れで、つまり去年の四月の内容が今年の四月にホームページで公開されるということ、その季節ごとの永瀬さんの作品のすばらしさ、魅力を感じていただきたいと思いますね。

白根 そうした機会になるとうれしいです。

小林 そうですね。まん延防止等重点措置が岡山でも解除となりましたから、ぜひ永瀬清子展示室にもお出かけたいただきたいですね。

白根 はい。永瀬清子展示室の企画展は、三月二十七日まで開催中です。お時間があればお越しください。

小林・伊藤 ありがとうございます。

白根 ありがとうございます。

※記載されている情報は、二〇二二年三月二十一日現在のものです。

〈参考文献〉

松村緑「ソネットの系譜——日本近代詩における」『東京女子大学附属比較文化研究所紀要』第三十四号 一九七三年三月

『資料集—永瀬清子の詩の世界 第四集』赤磐市教育委員会熊山分室編集発行 二〇一七年二月